
学園黙示録 High School Of The child

想像屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 High School Of The child

【コード】

N9250M

【作者名】

想像屋

【あらすじ】

学園黙示録の世界に存在しないキャラを投入してみました。

この小説はふとした思い付きから生まれました。

ホント駄文です。それでも呼んでくださる方のためできるだけいい作品にしたいです。温かい目で見守ってください。

第一話（前書き）

あんなあらすじでしたのに読んでくださってありがとうございます。

この小説の主人公は一人称がオレ

です。漢字で俺にはしません。

なぜかはシナリオのところで察してください

ではどうぞ

第一話

ある日、世界の何かが狂ってオレの生きていた世界は変わってしまったと言っ

それは（奴ら）が現れてしまった事が原因・・・のはず

（奴ら）は元人間だ・・・と思う

<奴ら>に噛まれた者は必ず<奴ら>になってまた人を襲う・・・らしい

そう、<奴ら>の様にその本能の命ずるままに、己にたった一つ残された欲求、食欲を満たすことだけを考えて行動する理性は無いはずだ・・・たぶん

なぜ、オレが何も知らないかというと

オレが現状に気づいたのはついさっきだからだ

オレが屋上の展望台で昼寝をしていた（授業をサボるといふより体力的に）

そのとき、

「そんなことしちゃだめっ！ならないわ！永は 奴ら なんかにならない！！永は特別なのよ！！」

「永！ほら！ 永が死ぬはずない・・・」

オレ

(うるせー)

「うう……う……」

「そんな……こんなウソ……ウソよ……」

「確かに馬鹿ばかりよ　でも　本当なんだよ……!」

「いやああああああ!!　なんでなんで!!」

「やらなければ　麗が喰われていた」

オレ

(ねみーんだよ)

「私が……私は……助けて欲しくは無かった!!　永のこんな姿なんて見たくなかった!!　こんな風にして生き残るくらいなら永に噛まれて　私も　奴ら　になりたかったのに!!」

「奴がそれを喜んだとは思えない」

「孝に何がわかるっていうの?　そうだわ　そうだったのね!」

「孝は本当は永を嫌っていたのね!!　私とつきあっていたから!!」

オレ

(バカッブルか?)

「ちょっと どこに行く! うってのよ!？」

「僕がいたら邪魔だろ 下に下りて生存者探して脱出する。」

「なつ・・・何いつてるのよ! 1人でどうにかなるわけないじゃない!!」

「ねえ孝 やめてえっだめっだめえっ ごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい ごめんなさい」

「本気じゃなかったの! 本気で言ったんじゃないの!! お願い お願いだから一緒に 一緒にいて!!」

オレ

「だーーーーーうるせーーーーへ?・・・何で死
体がココに?」

下を見下ろすとオレンジの髪の子と金属バットを持った男そしてその横に頭を割られた死体が転がってた。

孝&麗

「小学生!?!?!?!」

と、このバカップル?が不思議そうな顔をして言った。

第一話（後書き）

感想ください

キャラクター紹介（前書き）

オリキャラを紹介します

キャラクター紹介

長瀬 マイク 本名 マイク クロウリー 長瀬

年齢

10歳

身長

小学4年生平均身長より3センチ低い 体重平均

学年「高校」1年生

容姿

年齢のとうり童顔だがかなり顔立ちが整っている髪の色はほとんど白「ほとんど白髪」いつも帽子や何かをかぶっている

能力

瞬間記憶能力で一度見たものは忘れない今まであらゆる本を読んできたため知識は人並み以上

絶対音感

脳操作

自分の脳を操作できる

射撃が得意

昔見た映画の主人公を真似たり応用したりしてリベ オンのガン型を使い一度に13体位なら倒せる

運動神経も動体視力もかなりいい

ハッキングもかなりできる「パソコンの本をかなり読んだため」

IQ140程度

弱点

脳を酷使しているためプラス10歳のため昼寝が不可欠寝ないとどんな状況でも眠たくなってしまい最悪眠ってしまう

性格

転入当時は小学生らしくしていたが心の中では見下していた「奴ら」が現れてから性格を隠すのをやめた

本来の性格は残酷で非道だがやさしさもそれなりにある好奇心旺盛であるなどで不安定な性格

小学生扱いとうるさいやつは嫌いである

大抵相手を悪口まがいのあだ名で呼ぶ

経歴

10歳までアメリカで暮らしていた飛び級を重ねて大学まで行くつもりだったが父親の仕事のため日本に来たそのときアメリカで高校1年だったため藤美学園に一年として転入した。

武器

頭脳

改造エアガン3丁サイレンサー付

威力

銃の2分の1ともはや兵器である
本物の銃も持ち出せたが10歳の体上銃の反動には無理があるため
使わない

勘がかなりいい

色気やらは全くわからない

父親のことが嫌い母親は5歳のとき殺されていたなどが彼の性格を
生み出した

こんなキャラです

チートというより天才というのがぴったりのキャラだと自負して
います

以上キャラ説明終了 チャンチャン

キャラクター紹介（後書き）

いきなりのキャラ紹介でしたね
どうもすいません

第二話（前書き）

本当に読んでくださってありがとうございます

では第二話どうぞ

第二話

前回のあらすじ

孝&麗

「小学生！……！！……！！……！！」

以上

オレ

「オレは10歳だが小学生じゃねー」

孝&麗

「「10歳！……！！……！！」」

等とペチャクチャ喋った後、現状などを聞かされた後、自己紹介する事になった

オレ

「オレはこの学校の一年生の長瀬 マイクだ。どう呼ぼうと構わない」

孝&麗

「「じゃあ……小学生で」」

マイク

「殺されてーのか？」

マイク

(こいつ等さっきと違って笑ってやがるが仕方ねーか)

マイク

「で、こいつを殺したのはお前か？」

すると悲しそうな表情で

孝

「ああ僕がやつ」「お前は正しい」「え？」

マイク

「おまえが行動を起さなきゃお前達両方とも死んでたぜ」

マイク

「こいつもそれを望んでないぜ、きっと」

孝

(こいつほんとうに10歳かよ)

麗

(私達ですらとりみだしってるってゆうのにこの子、何者)

麗

「そつだ、お父さんに電話してみる孝ケータイ貸して」

孝

「ああ」

マイク

「無駄だと思つぜ！」

麗

「そんなのかけてみないと判らないじゃない!!!!」

マイク

「なら、「自由に」

ピピピピピピ

「現在回線がこんざつしています。少し」
ブチ

マイク

「ほら言ったろ」

とても辛そうな顔をする麗を見て

マイク

（はあこいつら何かあったらすぐに精神崩壊しそうだな。なんかで
勇気づけてやるか。さてどーやって・・・）

少しすると

マイク

「さて、遊びに行きますか」

すると怒った表情で

孝

「おまえやつぱり何もわかってないじゃないか！！！」

麗

「そうよ、何もわかってないすぐそこに＜奴ら＞がいるのよ。あ
なたみたいな子供が行ったらすぐに＜奴ら＞の

餌食よ！！！！」

その静止も虚しくマイクはバリーゲードを飛び越えた10歳にして
はありえないほど飛んだしかしそんな事をすれば＜奴ら＞も見逃し

てはくれない

すぐにマイクを囲むように群がってきたのだ

嗚呼アアア亜あアア その声がどんどんマイクに近付いてくる

麗

「マイク早く逃げて!!!!!!」

孝

「僕が行ってくる」

麗

「だめよ!!!!あなたまでく奴ら>に食われてしまっわ」

孝

「じゃあ どうすればいいんだ!!!!」

その時

マイク

「何もするな」

と怒鳴った

その瞬間く奴ら>の1匹がマイクに掴みかかろうとしたその時だった

マイク

「この・・・クズどもが!!!!」

そう言つとマイクは鞆の中から2丁の拳銃を取り出したのだ。そして、銃を構えるなりく奴ら>のこめかみにぶっ放したのだ チュン その銃はエアガンのようにだが威力が並みのそれとは違った

なんと打ち出された玉は<奴ら>の一人の頭を貫通したのだその時、
マイクは笑った、その後が凄いなんとほとんど囲まれているに等しい
状況で目にもとまらぬ速さで<奴ら>の頭を性格に貫いていく射撃の
技術がすさまじかったのである。

まさに某映画のガン型のようであった

<奴ら>は次々と倒れていったマイクの身体に触ることも出来ずに
屋上にいた<奴ら>の内分の1を10秒足らずで倒したのだ

孝

「なんだよ今の？」

マイク

「だから何もするなって言っただろ、へへ」
さつき<奴ら>を殺してた奴とは思えないほどの笑顔でこっちに振り
向いた

呆けている孝と麗に目掛けて叫んだ

マイク

「おいそのバカップル、ここにいっても時間の無駄だ下に降りて
生存者探してここから出ようぜ」

孝&麗

「ああ（ええ）」

そして、降りてきた孝と麗とマイクは生存者を探して学校を脱出する
ため階段に向かったのであった

第二話（後書き）

さーこの小説の主人公の特技のひとつが発揮されました。

これからもこんな調子で書いていきたいと思えます

よろしくおねがいします

では、また1週間後にもおあいしましょう

第三話（前書き）

いやーこんな小説でもお気に入りにしてくれる方がいてホントに感謝です

少し早めに投稿できたので投稿します

では、ごじげん

第三話

前回のあらすじ

マイクの実力が明らかに！！！！！！

以上

階段に向かって走ったマイクたちはジャマなく奴ら>を蹴散らしながら階段にたどり着いた

そして、階段を降りている途中

麗

「ねーどこに逃げるの？」

孝

「家さ、何とか他の生き残りとも合流して協力して脱出しよう。なにみんな地元の奴らだなんとかなるさ」

麗

「そうね」

マイク

(どうだかな)

麗

「そうだ、孝のお父さんたち連絡取らなきゃね」

孝

「時間が空いたらでいーよ、親父はどうせ単身赴任だしお袋は小学校の先生で家にいねーし連絡取れたら取れたでうるせーし」

麗

「フフ、こんな時に笑わせないでヨー！」

麗

「そういえば、マイク君のお家はここから近いの？お父さんかお母さんはいえにいるの？」

マイク

「いねーよ親父は仕事で出かけたしお袋はあの世だよ！」

麗

「そう・・・それじゃーお父さんが心配ね」

マイク

「（じゃっかん小学生扱いしてねーか？）心配じゃねーよあのクソ親父はこのくらいじゃ死なねーよこれくらいで殺せるんだっただらオレが殺してる」

麗

「え？」

マイク

で決つてたその横でデブ男が何かを構えてた

マイク

(なんだあれ釘撃ち機か?)

そして周りを確認した

マイク

「8体か」

冴子

「右は任せろ」

麗

「左を抑えるわ」

そして麗は先を尖らせた棒でく奴ら>の一人をなぎ倒した

冴子

「ほっ」

冴子が感心していた

孝

「でやー」

と飛び上がりバットでく奴ら>の一体を殴り飛ばした

冴子は手持ちの木刀でく奴ら>2体の頭を勝ち割ったそりもかなりの速さで

それを見ていたマイク

マイク

「ひゅー」

と口笛を吹いていた

マイク

「さーてオレもゴミ掃除を始めますか」

そして、マイクは鞆から2丁の改造エアガンを取り出し残りのく奴ら>の頭に撃ち始めた

両手をクロスさせ両サイドに居るく奴ら>の内2対をしとめ後ろに振り返り残りの2対の頭を打ち抜いたそのかんほんの一瞬であった

デブ男

「なんだあの撃ち方それにあのエアガンは威力が規定違反どころじゃない」

等ぶつぶつほざいていたがマイクは聞いていなかった

冴子

「子供の割りにかなり出来るじゃないかすごいぞー！」

等とかなり驚いていたが

マイク

「オレを子ども扱いすんじゃないねー」

冴子

「それは済まなかったな」

などといつもの無駄な会話が続いた

しかしその横でツインテールの女が放心状態だった

それを麗と天然校医が慰めていた

そして孝がガラスのドアを閉めていた

冴子

「鞠川校医は知っているな私は毒島 冴子 三年A組だ」

孝

「小室 孝 2年B組」

麗

「去年全国大会で優勝された毒島先輩ですよ。わたし槍術部の宮元 麗です」

デブ

「あ・・えつと・2年B組の平野です」

冴子

「よろしく」と冴子は笑顔で言った

デブ男が鼻の下を伸ばしていたのは言うまでもない

冴子

「で、ボクのお名前は？」

マイク

「（いくらオレが十歳でも身体が小さいいつつてもだぜ高校の制服を着てるんだから（特注だけど）一人くらい高校生と気付いてくれても良いんじゃないか？）オレは永瀬 マイクだ。ひとつ言っておく俺は十歳なのは否定しない。だが、オレは高校生であって小学生ではない」

冴子や麗と孝

「はははははは」「ふふふ」「どんだけ子ども扱いされんの嫌なんだよ・はははは」

マイク

（こいつら何時か殺す）

等と話し込んでいた時

ツインテール

「なにさ！みんなデレデレして！！何が先輩よ宮元なんか留年してるから同じ年の癖にそれに、ナニ、なんでこんな子供が居るのよ！！！」

マイク

(こいつから殺そうかな)

孝

「何言ってるんだ、高木」

高木

「バカにしないでよ！！わたしは天才なんだから本気になったら誰にも負けないのよ！！・・・私は・・・私は」

そのとき冴子が高木の肩に手を置いて

冴子

「もついい十分だ」

と優しい声でいった

そして高木は横にある鏡を見た後、冴子の懐で泣き出した

高木が泣き終わり孝たちは職員室に行った幸い<奴ら>はいなかったそして入口にバリゲードを作っていた

孝

「ふうこんなもんか」

冴子

「皆息が上がっている少し休もう」

そして色々な話をしていたがオレはある問題と戦っていた

それは……誰しも必ず襲われる……睡魔という化け物と

マイク

(ねみー…そういや今日は昼寝の途中で起されてたんだ)

マイクはかなりうとうとしていた

麗

「マイク君もしかして眠いの？どうする？後で起してあげるから寝る？」

マイク

「別に眠かねーふああ…あ！」

鞠川

「今日まともに昼寝できてないでしょっ？」

冴子

「眠れる内に寝ておけおそらくこの後も動きっぱなしだ、ん？」

マイク

「すう・すう・すう・すう」

マイクは床に寝転がって寝ていた

孝

「寝たのか？」

麗

「そのようよ」

この時、皆同じことを考えた

マイク意外一同

☆☆☆☆(この子)寝顔だけは可愛いな！！！！☆☆☆☆

第三話（後書き）

今回はここでお終い

また次回会いましょう

後、感想お願いします

キャラ紹介2 (前書き)

さーまたまたいきなりキャラ紹介です

今回は原作キャラ説名です

キャラ紹介2

小室 孝 こむろ たかし

声 - 諏訪部順一 / 原田ひとみ（幼い頃）

年齢 - 17歳 / 身長 - 172cm / 体重 - 5

8kg

主人公。私立藤美学園高等部2年生。頭に血が上りやすいところがある。幼馴染の麗を守るため、奮闘する。また、沙耶とも幼馴染である。物語当初は麗との過去の経緯から無気力な一面を見せたり、「面倒」を口癖にしていた。

特別な身体能力や技能が無いごく普通の少年だが、いざという時の決断力や行動力が非常に高く、面倒がりつつも「やらねばならないことは自分から率先して行う」気概の持ち主。また、他者を牛耳ろうとせず仲間の意見や感情を受け容れる度量と精神の均衡を持ち、他のメンバーから信頼されている。そのため、一行の中ではリーダー的存在。麗のことが好きである

宮本 麗 みやもと れい

声 - 井上麻里奈

年齢 - 17歳 / 身長 - 164cm / 体重 - 5

0kg / スリーサイズ - 87(E) - 57 - 89cm

ヒロイン。孝の幼馴染で1歳年上だが、留年したために学年は同じ。槍術部に所属し、長柄物を振るって「奴らへ果敢に立ち向かう。辛い状況下でヒステリックに振る舞う時もあるが、孝のことは頼りにしている。

鞠川 静香 まりかわ しずか

声 - 福井裕佳梨

年齢 - 27歳 / 身長 - 176cm / 体重 - 58kg / スリーサイズ - 108(J) - 62 - 94cm
藤美学園の校医で、プロポジション抜群の美女。唯一の運転免許取得者、大学病院から臨時の校医として学園へ派遣されていたため、非常事態の中で学園から可能な限りの量の医薬品を持ち出そうとするなど、医者としても行動する。

高城^{たかぎ} 沙耶^{さや}

声 - 喜多村英梨

年齢 - 16歳 / 身長 - 155cm / 体重 - 52kg / スリーサイズ - 92(F) - 59 - 87cm

孝の同級生で、麗と同じ小学校時代の幼馴染。高飛車で天才を自認し、豊富な知識と高い分析能力を誇るツインテールの眼鏡っ娘。ただし、身体的にはごく普通の女学生であり、荒事も苦手。学園脱出前はコンタクトレンズを着けていたが、やたらずれるとの理由から、眼鏡へ変えた。

平野 コータ(ひらの)

声 - 檜山修之

年齢 - 16歳 / 身長 - 158cm / 体重 - 88kg

孝の同級生。沙耶に付き従う肥満の軍事オタク。学園生活ではそぶりこそ見せなかったが、実はアメリカのPMC・ブラックウォーター社「2」で銃器の取り扱い訓練を1ヶ月間受けており、その知識と射撃技術はマイクより上(マイクが近距離での射撃が得意であるが長距離の射撃が少し苦手である)が生き残るために必要不可欠なものとなる。ガス式釘打機をその場にあり合わせの物品で即席の突撃銃へ改造したり、機転にも優れている。

家族構成は「完璧」の一言。孝とマイク以外の誰に対しても敬語で

接し、対人衝突を避ける、表面上は平和な性格。しかし、>奴ら< に対しては非常に好戦的な性格へ豹変し、平和な性格の裏側に溜め込んでいた欲求不満を暴力的な言動として表に出す。

毒島 ぶししま 冴子 さくこ

声 - 沢城みゆき

年齢 - 18歳 / 身長 - 174cm / 体重 - 体
重56kg / スリーサイズ - 83(D) - 56 - 86cm
3年生。剣道部主将で、剣術を用いて接近戦で>奴ら<と渡り合う、
一行のフロントランナー。得物は登場時には木刀、。2年生時に全
国大会で優勝した実力の持ち主。凜とした強さと豊かな包容力を兼
ね備えており、一同の支えになる。

古風な日本人女性そのままの性格。男性に対しては一家言あるよう
で、劇中「男子」と認めた孝やコータやマイクには絶対の信頼を寄
せている。

キャラ紹介2 (後書き)

こんな漢字でキャラ説明終了

第四話（前書き）

本当に読んでくださって有難うございます

うう・・・目から涙が

では第四話どうぞ

第四話

前回のあらすじ

他の生存者たちと合流したマイクたち

以上

麗

「きつと元の生活に戻れるわよね？」

高城

「戻れるわけないし」

孝

「おい、何もそんな言い方」

高城

「パンデミックなのよ仕方ないじゃない」

鞠川

「パンデミック?!?!？」

マイク

「感染大爆発の事だ簡単にゆうなれば新型インフルエンザの様に感染者が世界中に続出する事だ」

冴子

「長瀬君起きてたのか」

マイク

「ああ、車で脱出する話のところで起きた、だがまだ眠い」

高城

「まあそれで正解よ。てかなんであんたそんなの知ってるのよ」

マイク

「俺は一度見たものは忘れない特技を持っててあらゆる本を全て記憶してるんだよ」

高城

（そんなの本物の天才じゃないのよ）

みんな

「「すごいなおまえ（マイク君）！！！！」」

鞠川

「そつだもつじき夏だから皮膚が白骨化するかもしれ」たぶんそれはねーぜ毬藻」え？ま・毬藻？」

マイク

「あれは動く死体だあんな存在に医学が通用するかわかったもんじやねーぜ」

高城

「その意見に私も賛成的を射てるわ」

冴子

「そうかなら家族の安否を確認した後、どこに逃げ込むかが重要なみなが勝手に動いては生き残れまいチームだチームを組むのだ」

マイク

（俺は一人でも生きていく自信があるがな）

皆の準備が整った

冴子

「出来る限り生き残りも拾って行くぞ」

孝

「はい」

麗

「どこから行くの」

高城

「駐車場は正面玄関からが一番近いわ」

孝

「よし！いくぞ」

ガラッ

とドアを勢い良くあけた

ドアの前にいたく奴ら>がこっちに寄ってきた

マイク

「おいデブオレが右サイドでお前左サイドを守れ」

コータ

「で・・デブ・・やってやるよ！！！！！」

パパン ビスビスと二人は両サイドにいるく奴ら>を撃ち殺した

マイク

「やるじゃねーかよオメーはデブはデブでも役に立つデブだな」

コータ

「キミも中々ですよ」

そして孝は目の前にいる敵を殴り飛ばした

孝

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

マイク&高城

「叫んでどつする」

そして、孝の所為で寄ってきたく奴らゝを蹴散らして階段に向かっていた

冴子

「確認しておくぞ、無理に戦う必要はない避けられるときは絶対に避ける」

高城

「連中音にだけは敏感よ。それから普通のドアくらいなら破る腕力があるから掴まれたら喰われるわ」

高城

「気をつけて」

その時

「きゃあああああああああああ」

その声に向かう

マイク

（自分からく奴らゝをおびき寄せてどうするこいつみたい）

ビク

孝

（あはは申し訳ない本当に）

そして、声の持ち主を発見

男2人と女2人だった

男

「は、離れてろ」

ああああああ

<奴ら>の一匹が襲いかかろうとしたとき

マイク

「デブチン撃て!!」

コータ

「言われなくても」

ビス

そして<奴ら>の一匹の頭に釘が刺さり倒れた

その後すぐに冴子が飛び出したそして木刀を振り下ろした

見事に<奴ら>の1体の頭を粉碎した

孝は階段から飛びバットで<奴ら>を粉碎した

麗は槍で敵の身体を突き刺し起き上がろうとしたところを蹴り飛ばした

でオレはというと残りのく奴ら>が4人のグループに襲いかかっていたので手すりからバク転をしてく奴ら>の前に現れ空中で2体のこめかみに銃を当てた

マイク

「ゴミはちゃんとゴミ箱(あの世)に!!」

パパン

残りの奴らは倒れた

女

「ありがとう」

マイク

「だまれ!!」

冴子

「彼なりの静かにしろだ。誰か噛まれた物は？」

女

「い、いません」

首を振りながら言った

麗

「大丈夫みたい本当に」

孝

「ここから脱出する一緒に来るか？」

女

「ええ」

マイク

「またお荷物が増えたな」

そして、2回の階段にたどり着いた

孝

「やたらと居やがる」

高城

「＜奴ら＞は音にだけ反応するのよ見えないから隠れる事なんて無いのに」

孝

「じゃあ高城が証明してくれよ」

冴子

「しかしこのまま校舎を逃げ回っても襲われたとき身動きが取れない」

麗

「玄関を突き抜けるしかないのね」

冴子

「高城君の説を誰かが確かめるしかあるまい」

マイク

「オレが行って来る」

孝

「ちょっと待て僕が行く」

麗

「え、ちょっと」

マイク

「お前もし奴らが物を見ていたらすぐに囲まれるぜ、オレならお前よりは戦えるぜ（早くしないとまた眠くなって来た）」

孝

「しかし」

冴子

「不本意だが彼の方が向いているにも事実だ彼は見たところ複数との戦闘に慣れているようだ」

マイク

「じゃー決まりで」

マイク

「そうだ、デブチン援護はよろしくお前オレより遠距離射撃上手いからな」

コータ

「まかせろ」

そう言うとマイクは音ひとつ立てずに階段を降りた

マイクは玄関のど真ん中でをつごくのを止めた

マイク

(本当に見えてないようだな)

そしてマイクは右手に構えたエアガンでとおくにあるロッカーにめがかえて撃った

バンという音を立てた

そして<奴ら>はその音に目掛けて動きだした

そして、マイクは合図した

孝

「よし行こう」

皆が階段を降りてくる

そしてほとんどが玄関を出たそのとき

カーン

最後の男の棒が当たったらしい

孝

「はしれ!！」

マイク

「あの男何時か殺す」

高城

「何でこうなったのよ黙っていれば適当な奴だけ倒してやり過ぎたかもしれないのに」

おああああ

高城の後ろにく奴ら>の一匹がその時、牙子がそいつを吹っ飛ばした

49

すこし前の方でマイクたちがいた

コータ

「ちいどんだん増えてくる」

その中、孝がく奴ら>の一匹の頭を潰し

孝

「話すより走れ」

マイク

「俺も本気出そうかな」

マイク

「害虫駆除の始まりだ」

そして孝と冴子は敵をなぎたおしコータは高城を守りながら前進し麗はやりで応戦しながら進んでいた

その時、男一人と女一人<奴ら>に囲まれていた。いや、すでに噛まれていた。

男と女

「ぎゃつああああー—————」

マイク

(せめて成仏しろよ)

マイクはその二人の頭を遠くから打ち抜いた

マイクは最後尾で後ろから来る敵をガンッカタで応戦していた

そして、近づく奴を殺していきバスに乗り込んだ我先と言わんばかりに後ろの席に行った

高城

「あんたも撃ちなさいよ!!!え?」

マイクは完全に眠りに就いていた

高城

「良く眠れるはねー」

コータ

「高城さんまあまあ」

鞠川

「まあよっぽど眠かったのねーわたしも寝ちゃおうかしら」

コータ

「先生は落ち着きすぎです」

そしてマイクは深い眠りに付いた

第四話（後書き）

今回はマイクの特技のガン⇨カタの説明

名前の意味は「ガン（銃）」と東洋武術の「カタ（型）」の組み合わせ。劇中では主に二挺拳銃を使用し、超近接戦闘に持ち込む事で、多数の敵を短時間で倒す戦闘技法

ガン⇨カタは、銃口をそらすため銃を捌くカンフーの様な素早い格闘に加え、非常に接近した状態での銃撃戦で、体術と銃撃を組み合わせる戦うという

ガン⇨カタはマスターすれば、飛躍的に戦闘力が上がる事とされているが、基礎の動きをマスターするだけでも攻撃力は少なくとも120%上昇、一撃必殺の技量も63%上昇する。さらに習熟すればその戦闘能力は計り知れないものになるという。

ガン⇨カタ使いは多数の敵が持つ銃の向きを一瞬で判断し、その銃弾の軌道を予測したまた型稽古や残心に類似した動作など、東洋武術に近い

等ですお判り頂けたでしょうか？

では、またいつか

第五話（前書き）

いやーホント読んでくださったことありがとうございます

感想ください

では、どうぞ

第五話

前回のあらすじ

なんとかしてバスに乗り込む事に成功したマイクは疲れが出たのか
すぐ眠ってしまった

以上

？

「マイク……は……おねg……」

マイク？

「ねえ……まっつてy……ねえ」

マイク

「ん？……はあくまたあの夢か」

マイクは目を覚ましたするとバスに自分のメンバー以外に知らない
奴が5、6人いた。

マイク

(誰だこいつら?・・・あ、他の生き残りか)

そのとき金髪の男が立ち上がり叫んだ

不良

「だからよーこのまま進んだってよく危険なだけだつてよ、だいた
いよ何で俺らまで小室達に付き合わなきゃならねーんだよ、お前等
勝手に町に戻るって決めただけだろう。学校の中で安全なところ探
せばよかつたんじゃねーのか?」

モヤシ男

「そうだよ、どこかにたてこもたほづが、さっきのコンビニとか」

ギキイイイイイイ

いきなり急ブレーキがかつた

そして毬藻(鞠川)が怒鳴った

鞠川

「いい加減にしてよこんなじゃ運転なんて出来ない!!!」

不良

「んな、んだよ」

冴子

「ならばキミはどうしたいのだ？」

不老

「ち、・・気にいらねーんだ。こいつが！・・気にいらねーんだ」

と孝を指差して叫びやがった

マイク

(この・・クズが)

孝

「何がだよ。俺が何時お前に何か言ったよ」

不良

「テメー」

不良が孝に殴りかかろうとする

そのとき後ろで小さな影が椅子を踏み台にし飛び上がったそれはマイクであった

マイクは不良の後頭部にかかと落としを決めたのであった

不良

「がつ！！！！」

不良は白目をむいてその場で倒れた

マイク

「このクズがギャーギャーうるせーんだよ次ぎ騒いたら殺す」

パチパチと手を叩いている男が

メガネ男

「いやー実にお見事素晴らしいかかと落としでしたよ長瀬君。しかし、こうして争いが起こるのは私の意見の証明にもなっていますね、やはりリーダーが必要なのですよ。我々には」

高城

「で、候補者は一人きりつて訳」

メガネ男

「私は教師ですよそして皆さんは学生だこの時点で資格の有無はハッキリしてます。私なら問題が起きないよう手が打てますよ。どうですか皆さん」

するとパチパチパチパチと後ろにいた奴らが拍手をしながら立ち上がった

クソメガネ

「ト、言う訳で多数決で私がリーダーという事になりました」

チユンとメガネの横をエアガンの玉が掠めた

メガネ

「どういづつもりですか長瀬君」

マイク

「誰がリーダーでも構わないオレはしたがわねーそしてリーダーになっただんならひとつルールをつくれ」

メガネ

「ルール？」

マイク

「寝ている俺を緊急事態以外で起すな起せば殺すか制裁だ」

とマイクは殺気を込めて睨んだ

メガネ

「ええわ、判りました（このガキーーーー）」

マイク

「いい返事だ」

そう言うとマイクは運転席の鞆川の後ろの席に座ると鞆川に小さな

声で何かを話して眠りについた

第五話（後書き）

いやーほんとマイクはよく寝ますなー寝る子は育つてか

マイク

「おい作者うるせーんだよ眠れねーよ」

作者

「こらマイクそのエアガンを早く下ろしてくれ怖い」

マイク

「ジャー静かにするか」

作者

コクコク首を縦に振る

マイク

「はあくすうすう」

作者

「寝たふつ〜じゃマイクを起こさないうちにはおもしろ〜」

第六話（前書き）

いやーたくさんの人たちに読んでもらって本当に感謝です

ではアニメ第五話の前半部分をどうぞ

第六話

前回のあらすじ

マイクはうるさいやつらに釘を打ち黙らせた

以上

マイクたちの乗ったバスは渋滞の真っ只中に居たその中で孝と麗はバスを出てすぐに地獄絵図のバスが

事故を起こした所為ではぐれたらしい

マイクはまた寝ていた

鞠川

「ふうーん」

マイク

「すうすう」

と退屈そうにしていた

クソメガネ

「そうですね、ですからそれぞれが勝手な行動をするよりどこか安全なと場所を得た後に行動すべきです

・たとえば家族の安否も規律のある集団行動としての準備ができ

てからそれから考えるべき問題でしょう」

などとマイクの方に注意しながらかなり小さな声で話していた

高城

「平野！」

と横に寝ていた平野を起こした

コータ

「あ、高城さんおはようございます」

高城

「あなたよくねてられるわね、ほら涎ヨダレ」

などと話していた

しばらくメガネは喋りつづけていた

高城

「マジでやばいわよ」

冴子

「確かになあれにはまるで信教宗教の勧誘だな」

高城

「まるでじゃなくてまんまそのとおりよ話を聞いてる連中を見てもなさい宗教カルトの目をしてるの」

などといろんな話をしていたそして自分の家族や家の話をしていた

そして、

鞠川

「で、どうするの私もいつしよに行きたいから
と車をとめて聞いていた

高城

「いいの」

鞠川

「私はもう両親いないし親戚も遠くだしこんなこといっちゃいけない
いんだけど紫藤先生あんまり好きじゃないの」

その瞬間みんなが笑った

マイク

「すうすう・・・むにゃむにゃ」

冴子

「では、どうするこのあたりはよく知らん」

高城

「とりあえず橋を確かめるのよ」

紫藤（クソメガネ

「どうしたのですか皆さん？ここは一致協力して……」

「ご遠慮するわ。紫藤先生、あたしたちはあたしたちの目的があるの！！修学旅行じゃあるまいし、あんたに付き合う義理なんてないわ！！」

高城が紫藤の言葉を遮り言う。

「ほう……あなたたちがそう決めたのならどうぞ自由に高城さん。なにしろ日本は自由の国ですからね！！しかし……」

紫藤はそこで区切り、

「あなたはこまりますね、鞠川先生！現状で医師を失うのはマイナスが大きすぎます。どうです、残ってもらえませんか？こちらにもあなたを頼りにする生徒たちがいるのです。さあ鞠川先生、居場所さえはつきりさせておけば高城さんたちも、困った時はあなたを頼りに出来る筈ですそれにあなたたちはなぜ長瀬君まで連れて行くつもりでいるのですか？」

高城

「あんたに任せておけないからよ」

紫藤

「しかしそれはあなたの独壇であって長瀬君の意思ではありませんあなた方が長瀬君の人生を決める資格はありません」

鞠川

「それなら大丈夫ですよ！」

紫藤

「な、なんと？」

鞠川

「長瀬君バスではじめに起きたとき私に今の状況になるはずだから
【俺は毬藻の選択に従う】って言っていました」

紫藤

「し、しかしですね今はどうかから」

瞬間、

バシッ

鋭い音とともに何かが紫藤の頬をかすめた。

「ひ、平野君・・・？」

「外したわけじゃない、たまたまはずれたんだ」

「き、君はそんな乱暴な生徒では・・・」

「俺が学校で何人やつつけたと思ってるんです！？だいたい、おまえは前から俺のことバカにしてやがったじゃねーか！！」

キレた

「 たがらぼくは・・・殺せる。生きている奴だつて殺せる」

「 ひ、平野、そ、そんなことは・・・・・・・・」

「 毒島先輩、先に降りてください！あと毒島先輩、長瀬を背負って行ってくれませんか、ぼくが後衛をつとめますので」

「 ああ、判つた。男子だな、平野君」

そして、いまだに寝続けていたマイクを冴子が背負い高城、冴子、平野、鞠川達はバスを出て歩道橋を登つていった

第六話（後書き）

いやーほんとにマイクは寝てるときはお荷物ですよー

チュン

「え？今何かが掠めた様な」

マ、マイク寝ぼけて僕に撃つのはやめてくれ

チュンチュンチュンチュン

のわーー誰か助けてー

では皆さん僕が殺されないうちにさようなら

第七話（前書き）

本当にお待たせしました

これからはサボることなく

書き続けていききたいと思います

第七話

前回のあらすじ

平野が漢を見せた

以上

バスを抜け出したマイクたちは橋に向かう途中、奴らに囲まれてしまった

バシ

冴子が木刀を振り、奴らの一匹が倒れた

冴子

「こーも多くては敵わんな平野君」

ビスビス

ガス釘撃ち銃で平野が、奴らうちのうち2匹の頭を打ち抜いた

平野

「そんなゆうちょうな事いってる場合じゃありませんクソ、もうマガジンが底を尽きそうです」

冴子は平野に木刀を見せて

冴子

「だったらこれを貸そうか平野君？」

平野

「肉弾戦は無理です」〔泣き〕

冴子

「マイクさえ起きてくれれば少しは変わるのだが」

平野

「マイク…！いいかげん起きろよ…！…！…！…！…！」〔怒り〕

マイク

「…すう…すう…すう…すう…」

平野

「規則正しく寝息立ててんじゃないよ……！」

そうマイクはいまだに夢の世界

鞠川と高城はぺちやくちゃ言い合っていた

平野

（みなさん、空気読んでくださいよ……涙）

平野

「あ……！！マガジンが切れた」

マイク

「うるせーよ人が気持ちよく寝てんのによ……これって結構やばい状況？」

冴子

「やっと起きてくれたか長瀬君寝起きですまないが手伝ってくれるか？」

マイク

「目覚ましにはいい運動だな」

すると

マイクは背中 of 鞆から改造エアガンを2丁出して

やつらに目掛けて走った

そしてやつらの前まで行くと飛び上がり

マイク

「おはようそしておやすみだクスども」

チュンチュン

奴らの内2匹の頭をゼロ距離で打ち抜き空中で体を捻り後ろにいる奴らを撃ち抜いた

冴子

「相変わらずあの射撃の腕は称賛に値するな平野君もあれ出来るか？」

平野

「あれは無理です僕とは射撃の技術が根本的に違います。まずあんな撃ち方どこでも普通教えてませんよ」

高城

「あれはガンカタよ昔映画であの撃ち方で戦う主人公を見たことがあるわ」

マイク

「正解だ、よく解つたなこれは映画を見て実践に使えるかもと思って練習していたんだよ」

平野

「高城さんやっぱり映画好きですよね」

高城

「ち、違つわよ偶偶よ、そう、たまたま」

マイク

「へへへ、バカカップルの登場だぜ」

ウオオオオオオオン

そこには

小室と麗がバイクに乗って飛び台から飛び上がった姿があった

平野&冴子

「「小室」」

小室はバイクで>奴ら<をドリフトで轢いた

麗は槍で>奴ら<をなぎ倒した

マイク

「役者は揃ったみたいだな。さあ、殺ろうか」

ブウオオオオオオオ

平野が奴らに襲われかけていた

小室

「平野！！！！！！！！！！」

すると小室は拳銃を平野に投げた

それを受け取った平野はニヤリと笑うと小室が居るのおかまいなしに2発撃った

それは見事に奴らの脳天に命中しかし

平野

「ダブルショット」

ジュインジュイン

とある人物の足元にもあたった

マイク&小室

「「デブチン「平野」俺ごと狙いやがっただろっ！！！！！！！！怒」」

平野

「何のことだかさっぱり」

マイク&小室

(こいついつか殺してやる)

そして、なんとか進行方向にいる奴らを片付け進もうとしたとき

冴子

「長瀬君いくぞ」

マイク

「ちよと先に行ってくれ」

平野

「何するんだ」

マイク

「時間稼ぎ」

一同

「?????」

マイクは自分の鞆を弄ると

マイク

「テテテ、テッテテ〜ダイナマイト」

一同はずっこけた

小室

「お前は何かちゅうもん鞆に入れて学校来てんだ」
結構キレて

冴子

「さすがに驚いたぞ長瀬君」
不思議そうに

麗

「それどう使ったつもりで持ってきたの？」
驚き顔で

高城

「ありえないわ」
ひきつつていた

鞠川

「どこで手に入れたのよ」

平野

「おまえ、いったい何者だよ」

そして

一同

「おまえ（永瀬くん）（あなた）本当に小学生!!!!!!!!!!!!!!」
「！」

マイク

「皆さんをぶっ飛ばそうと思います」

一同

「「「めんなさー」」」

するとマイクは端の反対側にいる奴らに投げつけた

マイク

「みんな走れ」

ドグオオオオオオオオオ

その爆発は20体近くの奴らを吹き飛ばし橋を崩れさせた

マイク

「ひゃほーうこれマジですっきりするなー今度もこれやろうかな」
目をキラキラさせながらご機嫌であった

冴子

「もつ何も言つまい」

一同

コクコクと首を縦に振った

以上

第七話（後書き）

作者

「マイクおまえ原作無視って何使ってんだよ」

マイク

「ダイナマイト」

作者

「おまえせめてかんしゃく玉くらいにしろよ、寝てばっかで起きたら暴れまくるわお前はやっぱり小学生だ！……！」

マイク

「テテテ、テッテテ〜ダイナマイト」

作者

「じゅんなさいornz」

マイク

「判ればよろしい」

作者

「では監修さんちよつなら」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9250m/>

学園黙示録 High School Of The child

2010年12月12日14時22分発行